

「国際武道大学別科専修課程における会話授業」

(待遇表現の観点から)

国際武道大学 別科武道専修課程
黒羽友子

はじめに

国際武道大学別科武道専修課程は設立されてから15年になります。私にとって、この15年間は、自分が日本語教師として、本当にこのような授業でよかったのか、あるいはもっと改善すべきことがあるのではなかったのかという自問自答の毎日だったといえます。今回の発表は、私が取り組んできた国際武道大学別科武道専修課程の日本語授業の実態と、それに対する皆様からのご意見、ご批判を賜りたいというところにあります。私の耳には痛いことも多々あると思いますがそれを厭う気持ちはありません。別科武道専修課程は、武道という名がついていることから推察されるように、他大学の別科とは異なった特色があるといえます。この特色ある別科武道専修課程の日本語教育をより意味のあるものにしたいという願いから今回の発表になりました。

1. 国際武道大学別科武道専修課程について

別科武道専修課程の大きな特色は、別科設立の目的が海外における「日本の武道」としての剣道あるいは柔道の指導者を養成することであり、別科生の多くは剣道・柔道という日本の伝統的武道の指導者あるいは選手になるという希望をもっていることです。別科生の中にはオリンピック選手、国家代表選手、世界選手権代表選手なども多数在籍しています。従って、柔道や剣道についてさらに研鑽を深め、武道に関する何らかの知識を得たいという気持ちで入学してきました。日本語学習の目的も何らかの形で武道や柔道、剣道に関係することが多くなります。ところで、武道という言葉が耳にされることも少ない方々には、「日本の武道としての」という言葉に実はとても深い意味があることを先に述べておかなければなりません。

剣道・柔道の競技者人口は、世界的傾向として、近年増加の一途をたどっていました。とくに柔道に関しては東京オリンピックでオリンピック種目となってから、競技者人口が世界中に広がり、今日では多くの国でスポーツ競技として行われているといえます。そしてここに、武道としての柔道とスポーツ競技としての柔道という、実はとても深い問題が生じました。この武道としての柔道とスポーツとしての柔道という狭間で多くの柔道家が苦しんでいるのも一つの実状といえます。

一方、剣道もまた、韓国をはじめ東アジアや欧米各地で近年非常に人気が出てきた武道です。世界選手権が三年ごとにおこなわれ、競技者人口も世界選手権参加国も年々増加しています。もはや日本のお家芸などとはとてもいえない状況です。しかし、海外では柔道とは異なりまだ剣道のほうが、「日本の武道として」受け入れられています。外国人剣道家にも、剣道を単なるスポーツ競技としては考えず、そこに武道としての何かを見つけようとしている方々が多いと思います。が、やはり、韓国の剣道家、アメリカの剣道家、カナダの剣道家、ヨーロッパの剣道家にはそれぞれの剣道への理解があ

り、稽古方法にもそれぞれの特徴があります。また、剣道がオリンピック種目になることを希望する国や、それでは武道としての理念が変質するのではないかという危惧から慎重にという国などいろいろです。たとえば、稽古の始めと終わりに必ず「黙想」と「礼」があります。ドイツの剣道場では、「黙想」と円陣を組んで一回だけ、互いに「礼」をします。ヨーロッパの他の道場でも、日本から先生が来られたときだけ「カミザ」が設けられ先生に「礼」がありますが、自分たちだけの稽古のときは円陣を組んで、互いの「礼」だけというのを何度か見たことがあります。それは剣道場ではすべての人が「修業者」であり、そこに段や年齢による差はないという精神に基づいたものだそうです。日本の道場では先生方と弟子は二列に並び、まず、「カミザ」に「礼」があり、先生に「礼」があり、それから互いに「礼」があります。「礼」は武道の中ではとても重要な思想と考えられていますが、やはり国によってその理解に違いが見られます。これはほんの一例ですが、日本に来た武道家には「日本の武道」へそれぞれの理解を有していると思います。

1. 1. 別科武道専修課程の留学生について

別科武道専修課程の定員は20名で、だいたい常に15～18名程度の学生がいます。年齢は18歳から40代後半まで毎年ばらばらです。出身国はだいたい8カ国から13カ国にまたがり、特定の国からというのはありません。教育歴は、高校卒から、博士課程修了者まであり、これもばらばらです。別科生の資格として一番重要なことは何度も述べてきたように、柔道や剣道の経験者であることです。大きく分けて、柔道専攻は20代が多く、剣道は30代以降が多くなります。

柔道専攻の学生には、すでに自国で体育の教師をしていたり、あるいは自国の大学での柔道指導教員になるという希望をもつものが多くみられます。やはり柔道選手として活躍していたという実績からだと思います。ところが、時としてですが、柔道選手の場合、出身国によって、学習経験がほとんどないことがあります。韓国や中国などですが、選手は朝から練習、昼休みだけ自分の教室でご飯を食べて、午後練習場で、ただ一日中練習だけです。彼らにはまず学習するという習慣がまったくありません。彼らが鉛筆をもって、ひらがなとカタカナを覚えるというのは、彼らにとって本当に信じられないほどの苦行でしかないときもあります。これもごくわずかではありますが、本当に学習経験がなかった彼らが、時間はかかりましたが学部進学、大学院進学、そして自国の大学の教員になっていく場合もありました。

剣道専攻の学生は、ときには自国の大学で歴史を教えていたり、あるいは数学の専門家であったり、大学はすでに卒業しているという場合が多く見られます。また剣道専攻の場合、平均年齢や、その職業も弁護士、司法関係の公務員、銀行員など社会的評価も高いのではないと思われる場合も多く、一年間の休職、妻子を残してという場合もよくあることです。実は剣道を海外でするということは、竹刀、防具など非常にお金がかかります。必然的に彼らは収入が高く、社会的地位も高い人が多くなります。彼らの場合、英語などの文献で「武道」「禅」「剣道」などについてかなりの知識があり、日本語を学習する以前に、英語などでさらに詳しく知識を得ようとするのが多く見られます。また柔道・剣道を問わず一年間自国の大学を休学して入学してきている場合もよく見受けられます。

1. 2. 授業の中での困難点

これらの学生を相手にして、当初まず困るのが共通の言語がないということです。武大の中での彼らの個人的な会話等はだいたい英語でなんとかなるのですが、アジア系の学生には日本語授業のときには、まったく英語を受けつけない者もいます。あるいは反対に、英語のほうが自分にとっては有利

と考えて、英語ばかり使いたがる者もいます。また、すでに日本語能力試験一級や二級、三級を合格している、あるいは日本語学習歴が何年もある者、自国の大学で日本語、日本学を専攻してきたという者など、本当にごちゃませというのが実状です。そして、日本語や日本思想、日本文化を学びたいという強い意志を持った者・・・や、日本人と少し話せればいいという者、日本の大学、大学院への進学を希望している者などです。他大学の別科と少し異なると思われる点は、日本で仕事をしたいという希望を持つ者もいますが、その数は決して多いとはいえません。

そして、15~18人という少人数なので、日本語能力に応じてクラス分けがかりうじてできるのが文法のときだけで、会話や読解、日本文化では全員参加の授業ということになります。

今回は、日本語演習Ⅰ会話の授業について、具体的に話したいと思います。

2. 会話授業について

社会生活の中での言語行動というのが、日本語教育の中でいかに具体的に考えられなければならないのかが、私にとっては関心のある課題でした。そしてそれは、大きく二つの指向性があると考えられています。一つは、その行動の目的を効果的かつ効率的に果たすことへの指向性です。そしてもう一つは、円満な対人関係を保とうとする思いへの指向性です。(国立国語研究所2005p.33)

実際に、二つの授業活動をその例として取上げてみたいと思います。一つは、勝浦の市民、学部の日本人学生、大学の守衛さんなどとのインタビューを中心にしたもの。もう一つはロールプレイを用いて、日本人学部生の協力のもとに武道系教員、クラブの先輩・後輩、学部の日本人学生との会話を想定しておこなう会話練習です。言語活動におけるこの二つの指向性との関わり合いから述べてみたいと思います。

2. 1. 勝浦市民や学部の日本人学生の協力のもとに行われる会話練習

4月、別科生は大学の食堂等で、日本人学生を相手に自己紹介を含め、話しかける練習をします。質問表を作成しておきます。相手の名前、趣味、学科、年齢、勝浦でのおいしいところ、100円ショップの場所、デートに適した場所などの質問です。この質問は各自がそれぞれの日本語能力に応じて作成します。そしてこの情報を持ち寄って、それぞれが授業で発表します。おいしくて安いラーメン屋や飲み屋などの情報が人気です。

5月は、勝浦市の人々と実際に話してみることを試みてきました。江戸時代から続く旅館、寿司屋、神社、寺、畳屋、酒屋、朝市で実際に話してみます。朝市での買い物はスーパーとは異なり、「いくらですか」「たまねぎは？にんじんは？じゃがいもは？」等、別科生は一つ一つ聞かなければならないです。朝市のおばさんたちには申し訳ないですが、非常によく話し相手をしてくれます。一人一人の日本語能力に応じてタスクを設けています。柔道専攻の学生には畳の作り方、材料などについて調べてみたり、禅に興味のある学生には寺で、住職と話してみる等です。中には、ほとんど何も話せないで、道行く人に寿司屋の場所をきき、たどり着いて自分の名前を伝えることができれば、少量の寿司とお茶をもらえるなどというのがあります。そして少し日本語で話せる学生には、宮司さんに神社と神道について話を聞いたりするのもあります。さらにそこで話された会話を、学部学生の協力の下に、後日授業でそのまま再現します。勝浦市民の方々、学部の日本人学生の協力がなければできない授業です。勝浦の方々、本当に根気よく話してくれ、それを大学の学部生がボランティアで、留学生の言語行動をビデオや筆記で記録し、ロールプレイでその光景を再現します。そのときには、ボラ

ンティアで参加してくれた学生が役割を分担して手伝います。

2. 1. 1. この会話授業の問題点

一番の問題は勝浦の方々にもものすごく迷惑をかけることです。幸いなことに、神社の宮司さん、寺のご住職は時間があれば、外国人に話してくださることを快く引き受けてくださいます。ただ、この方々との会話を希望する別科生は禅や仏教、神道に興味があり、また日本語能力も少なくとも3級以上のレベルの者を対象としていますが、実際には、まだまだ日本語能力が伴わず、先方にかかなりの迷惑をかけてしまう場合が多いです。また都合のつく時間帯と授業時間が合わないことや、一人一人がばらばらに動くので、目が行き届かないなどです。

後日行われるロールプレーは、日本人学生も加わり何度も、実際に別科生が話した同じ場面を繰り返します。使用された語彙の理解、態度など細かく見ていきます。たとえば、寺を訪れた別科生はジュースやお菓子を土産にもっていかせ、「ほんの気持ちです」と言って渡します。そして、お茶を勧められながら話しますが、ロールプレーでは学部生が住職になってその場面を再現したり、反対に別科生が住職になって、日本人学部生が日本人として模範とされる態度で住職の話をきくところを再現したりもします。寿司屋、畳屋、朝市のおばさんなどすべての場面を再現します。別科生には興味のある楽しい授業だと思われそうですが、日本人学部生には時間的にかなり負担がかかります。

2. 2. 待遇表現からの考察

言語面での特徴を見ると、寺、神社、旅館等ではおもに「です・ます」の丁寧形が使われた会話がなされています。しかし、朝市などでは「です・ます」の丁寧形はまったく使用されていません。「おにいちゃん、どこの国?」「お兄ちゃんいい男やし、これおまけやで・・・」「これおまけにやるし、こっちもこうで・・・」「こんなんであえの・・・」などです。別科生は、このいくつかの場面を見て、「です・ます」を使用するときと、使用しないときの区別が理解できるようです。そして日本語表現にもいろいろあることを肌で感じます。また朝市のおばさんたちは、親しみ、あるいは親近感をあらわそうとして、言葉の表現が普通形というよりも、もっと乱暴な話し方になっているということにも気がつきます。実際に、6月中旬のこの時期、親しい学部生との会話はほとんど普通形ばかりになり、品のない表現、汚い表現も見られるようになっていきます。またそれが友達としての親しさを表す表現ということも理解しています。

この授業では言語活動の一つの指向性である、話者の行動の目的を効果的に効率よく達成するという点では、朝市、寿司屋などは非常によくできていると思います。

3. 待遇表現に重点をおいたロールプレーについて

6月中旬から7月にかけて、クラブ活動での会話、先輩との会話に重点をおいた会話練習を行います。別科生にとって、剣道、柔道のクラブ活動でのコミュニケーションが円滑に行われることは、彼らの別科への留学目的、動機などから考えても非常に重要です。またここで得られた日本人剣道家、剣道仲間との人間関係は、彼らにとっては、時には一生続いていくかけがえのない成果になります。そして社会生活の中での言語活動の一つの指標である円満な対人関係を保とうとする思いへの指向性をもっとも問われる場面が道場の中であり、先輩・後輩関係なのです。

3. 1. 別科生の道場での人間関係

別科生にとって、重要な武大での人間関係は次の4つに大きく分けられます。

- ・ 武道系の指導教員
- ・ 一般の教員
- ・ 同じ部活の先輩と一年生（別科生はクラブ活動の中では一年生として扱われている）
- ・ クラブ活動とは全く関係のない日本人の学部学生

一般的に待遇表現が問題となる社会的環境で人間関係を分類すると、大学での学生生活と考えると、学長や指導教授、教職員、クラブ指導者、宿舍の管理者、掃除のおばちゃん、食堂のおばちゃん等が考えられますが、別科生にとってもっとも重要と考えられる人間関係はこの4分類と考えています。とくに武道の指導教員は非常に重要で、彼らにとっては一生の師ともなるのが武道指導者です。この先生方への待遇表現としての尊敬語と丁寧語は、どれだけ親しく話すようになっても絶対に必要だということに厳重に指導しますし、別科生にとってはよく理解できていることです。

3. 1. 2. 武道系指導教員を対象として

この武道の指導教員とのコミュニケーションを想定したロールプレーでは、「言葉」だけではなく、態度、動作、行動すべてにわたっておこないます。たとえば、後ろから先生の肩や背中に触れて、「ちょっと」と呼びかけたりしない。どれだけ毎日稽古をしていても、必ず「OO先生」と呼ぶなどです。別科生が指導教員に対して「きょうの稽古はよかった・・・」などとは決して言うてはいけない言葉です。「稽古をありがとうございました」だけ言えるなどです。（たまに親しくなった先生を呼び捨てにする別科生がいます。それが自分では親しさの表現と考えてのことですが、これも徹底的に注意します。）

このロールプレーでは、態度、礼、姿勢などが重要で、剣道部や柔道部の日本人学生によって行なわれる実際に行動を伴った指導が非常に効果的です。10年ほど前になりますが、道場で使われる語彙を調査したことがあります。そのときの感想ですが、道場では語彙、表現などだけではなく行動、態度、姿勢も重要な要素であると痛感しました。

3. 1. 3. 一般の教員を対象として

ここでいう一般の教員とは、武道系の教員ではないということです。この一般の教員と武道系の教員は、別科生の心の中ではまったく異なるカテゴリーに属しています。この一般の教員に対しては、親しくなったとき、別科生が普通形を使うこともしばしば見られますが、ロールプレーでは丁寧形「です・ます」を使うことを徹底しています。日本人学部生が体育大では、教員に対して呼び捨て、普通形は絶対使ってはいけないと注意を喚起します。ところが、六、七月ごろ、別科生が教員と話すことに少し慣れてきたころです。会話が上達してきた別科生によっては、親しさを表現したいと思うとき「ハイ クロバネ」と呼び捨てにしたり、普通形を使ってしまふことがあります。注意はしますが、教員側の理解のもとに穏便に注意され、それほど大きな問題とはなりません。が、やはり体育大ということをもっと意識するように厳重に注意します。

3. 1. 4. 同じクラブ活動の先輩を対象として

ロールプレーの授業が次々に行なわれてきますが、別科生に一番理解できないのが、柔道部や剣

道部の先輩との会話練習です。クラブ活動では、別科生は武大の一年生として扱われています。したがっていつも後輩として「です・ます」の丁寧形を必ず使用しなければなりません。しかし、別科生によっては、その年齢、経歴、社会的地位から19歳、20歳の大学生を先輩ではあるが、どうしても身分的上下関係の下のほうに自分を置くことになると考え、とまどいを感じます。それを解消しようとして、友達としての親しさを表したいと考えてしまいます。ところが、たとえ19歳の先輩と40歳前後の後輩であっても、先輩は後輩に「タメ語」で話されると、先輩・後輩関係を否定されたように思うようです。これは全く無意識に反応しているのではないかと思います。この無意識な反応というのも実はとてもやっかいなことなのです。また、別科生としては、年齢的にも自分がかかなり上で、人生経験も豊富、自分の国での社会的地位もあるなどの場合、同じクラブ活動の学部生とは、別科生の親切心から、先輩とはいえ若い人たちに友達としてもっと親しさを表現することが、人格的にすばらしいことだと思う場合すらあるようです。さらに、丁寧語の「です・ます」には、相手に対して距離感をどうしても生み出してしまいます。これも別科生にとって、なんとか自分は親近感をだしたい、距離感を縮めたいという気持ちと、現実の言語活動との間に大きな矛盾が心に残ってしまいます。

しかし、武道系のクラブは先輩・後輩関係は厳しく、剣道部、柔道部は中でも、もっとも先輩・後輩関係が厳しい世界です。この先輩・後輩関係は学年だけがその関係の決定要因で、年齢、学歴、段位、メダル、男女の性別、社会的地位などはまったく考慮されません。後輩は100パーセント丁寧語「です・ます」を先輩に対して使わなければなりません。たとえば飲み屋などで、友達として酒を飲んでいるような場合でも、部屋で武道とはまったく違う話で盛り上がっているときも、先輩は決して「タメ語」で話せる友達ではないのです。しかし、前述のように、別科生は丁寧表現の「です・ます」を使うことにどうしても、先輩との距離を感じ、どうにかして自分が相手に友達として親しくなりたい、友達として「同等」に話したいという気持ちを伝えたいと思います。そして自分と先輩である学部生との間には、先輩・後輩関係よりも友達関係を優先しようと試みてしまう結果が「タメ語」です。

そして更に大きな問題として、冒頭で述べたように、彼らの中で「武道思想」への彼らそれぞれの理解があります。とくに彼らには、道場で共に稽古をするものは、同等に修行者であって、そこに身分的な上下関係は存在しないという環境で稽古をしてきた者もいることです。彼らの理解する先輩・後輩関係は、先輩は後輩の面倒を見る、相談相手をする、個人的な親しい友人となり得る身近な人という要素が強く認識されています。そこには身分的な上下関係が存在していません。従って、「言葉遣いに気をつけて」と日本人学生に何度注意されても親しくなろうとすればするほど、普通形あるいは「タメ語」といわれるものを使ってしまうたりします。また、日本語の特徴として、同学年の友達の間で使われる待遇表現と、先輩が後輩に使う待遇表現には違いがあります。即ち親しくなればなるほど待遇表現が軽卑表現に近いものになるという傾向があり、とくに、先輩が親しく思う後輩に対してはかなり悪い待遇表現が使われます。しかし、別科生はそれを先輩が先輩としての立場から使う待遇表現とは考えないで、先輩が自分に友達としての親近感をもっているからそのような軽卑表現ともいえる待遇表現が使用されていると考えてしまいます。その結果、別科生も先輩に対してまるでごく親しい友達に対してのように普通形やタメ語、あるいは相手である先輩が使用した軽卑表現をそのまま使ったりしてしまうこともあります。そしてこのとき、これも先ほど述べましたが、別科生の言語活動によって、先輩としては全く無意識に先輩・後輩関係からこの別科生を除外してしまうという結果を引き起こします。別科生は同じクラブ活動内では、先輩・後輩関係がまず優先され、それは道場の中だけではなく、24時間であることをまず認識しなければなりません。

3. 1. 5. 別科生と日本人学部生との日本語コミュニケーション

別科生にとって、剣道部や柔道部の先輩との円滑な日本語コミュニケーションというのは何よりも大切なものですが、むしろ異なったクラブの日本人学部生とのコミュニケーションのほうがずっと円滑におこなわれているのが、実態だといえます。別科生は大学祭や地元の小学校や中学校を国際交流の一環として訪問するとき、自国の文化、歴史、社会状況などをパネルにして発表したり、スピーチをします。それを助けてくれるのが 20 名程度のワールドフェスティバルプロジュースーズというグループです。もう 8 年ほどこの活動が続いています。このグループの特徴は、クラブ活動に属さない者や、野球部、サッカー部など武道系クラブ活動以外の学生も多くいることです。この中では、やはり武大は体育大ですので、二年、三年、四年などは先輩と呼ばなければならないのですが、別科生にとっては「タメ語」や普通形で話せる本当によい仲間です。この彼らに聞いても、実は彼らも同じクラブ部活動の先輩と話すときが一番緊張するといえます。このワールドプロジュースーズの彼らの会話の中で気がついたのが「タメ敬語」といわれる「す」「っす」「うんす」の存在です。後輩が先輩に親しさを表現するとき、仲間意識があるときに使われています。この「タメ敬語」は教員に対しては決して使用できませんが、先輩・後輩関係の間では効果的であると思っています。同時にどこまでを対象として、さらにどんな場面での使用が可能かどうかが重要な問題と思われる。今後はこの「タメ敬語」について研究を重ねていきたいと思っています。

4. まとめ

国際武道大学武道専修課程の別科生の特色、また彼らがおかれている環境から彼らの社会生活における言語活動の二つの指向性とその実情をできるだけ明らかにしてきたつもりです。やはり、一番の問題は、武道を学びに来たという別科生の学歴、年齢、社会的地位、社会的評価、武道への理解に対する彼らの自負に基づいて行なわれた言語活動が、先輩・後輩関係に習慣として、あるいは無意識に有されている部分に触れてしまうときに生じる矛盾とその結果の大きさです。これをどのようにすればよりよい環境に改善していけるか「タメ敬語」の存在を手がかりに考えていきたいと思っています。